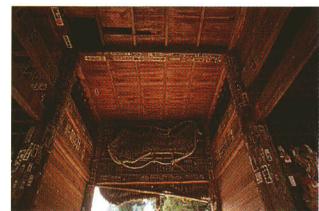




写真右——弘安寺山門
写真左——弘安寺觀音堂全景



これまでの伝承を補強する有力な手がかりとして、長尾原の弘安寺奥院がある。これも『村誌』から抜粋してみる。

「铸造場と伝える所に、お堂裏から佐賀瀬川に通ずる道路の中頃の南側に奥ノ院というのがある。俗に金ゴシ壇といつて、畠の中に方一〇米に一五米程の角壇がある。周間に三米幅の低地が、付近は畠に地ならししても掘りあげた痕跡が残っている。觀音像を鋳た時の金滓を埋めて盛りあげたものと伝える。あるいは四八壇の一つで、古墳でなければ、あるいは経塚ではないかとも思うが、周縁にはいくらか金滓が出るので、伝承に間違いない、この場所でなくとも、付近で鋳たではないかとも思う。この金ゴシ壇の西北に接して雜木藪の中に長さ九米、幅六米ほどの凹地がある。ここが鋳造の場所ともいう。鋳造には水が必要である

円満麗艶な慈悲相は常姫か

これまでの伝承を補強する有力な手がかりとして、長尾原の弘安寺奥院がある。これも『村誌』から抜粋してみる。

「铸造場と伝える所に、お堂裏から佐賀瀬川に通ずる道路の中頃の南側に奥ノ院というのがある。俗に金ゴシ壇といつて、畠の中に方一〇米に一五米程の角壇がある。周間に三米幅の低地が、付近は畠に地ならししても掘りあげた痕跡が残っている。觀音像を鋳た時の

金滓を埋めて盛りあげたものと伝える。あるいは四八壇の一つで、古墳でなければ、あるいは経塚ではないかとも思うが、周縁にはいくらか金滓が出るので、伝承に間違いない、この場所でなくとも、付近で鋳たではないかとも思う。

この金ゴシ壇の西北に接して雜木

藪の中に長さ九米、幅六米ほどの凹地がある。ここが鋳造の場所ともいう。鋳造には水が必要である

が、付近に水の流れた跡があり、今は水は涸れているが、いくらかは水の得られた場所かも知れない」

ミッシング・リンクも、ここまで辻棟が合つてくればついには輪となつて結ばれるとしてもいいのではないかだろうか。あと一つ、どうしても少々胡乱な伝承をくつがえすことができさえすれば……。

それは、「姫の身長に応じて身丈六尺二分の觀音像を鋳」という件である。実地調査によれば、寺院縁起の六尺一分も文部省指定書の六尺五寸も誤りで、六尺一寸七分が正しいという。メートルに換算して一・八七メートルである。女性の身丈にしてはあまりにも大きい。盛勝の拒否はそれにあつたとする不本意な説もあるほどだが、それは本当だろうか。

今一度、縁起を見てほしい。

「奉鑄觀音像、此姫應形、造六尺一分……

『形』には「顔だち・容貌」の意味もあり、「應形」と「造」の間には空白があつて文章は続いていないのである。これはむしろ素直に読みば、「姫の顔だちに似せた觀音像を鋳て奉つた。像高は六尺一分である」となるのではないか。

『村誌』にも、「娘に似た觀音像、化仏を鋳造し」とか、頭上化仏(小仏面)の「如來面の左右は前三面の静寂慈悲相の面で、殊に、向つて右側のものは円満麗艶で、その面貌は江川長者との常姫がこのような相貌であったかと想像されるほどの名作である」と書き記しているのである。

幸い、今回は大沢一元住職のご協力をいただき、かなりの程度、鮮明に化仏を撮影することができた。見れば見るほど、まさに円満麗艶な慈悲相である。

幸い、今回の大沢一元住職のご協力をいただき、かなりの程度、鮮明に化仏を撮影することができた。見れば見るほど、まさに円満麗艶な慈悲相である。



右頁写真——弘安寺銅造十一面觀音像。頭上化仏の中央は如來面。山口弥一郎氏の『村誌』では、左右の静寂慈悲相のうち向かって右側が常姫に擬せられている（国重要文化財指定／弘安寺所蔵）

写真右——脇侍不動明王像（国重要文化財指定／弘安寺所蔵）

写真左——脇侍地藏菩薩立像（国重要文化財指定／弘安寺所蔵）